川合　真木子（東京藝術大学）

5月18日（日）10:40－11:20　戸山キャンパス36号館3階382（AV2）教室　第二分科会

17世紀におけるポッツォーリ大聖堂内陣装飾画の主題と配置に関する復元的考察

ナポリ近郊の都市ポッツォーリの大聖堂は、かつてジョヴァンニ・ランフランコやアルテミジア・ジェンティレスキといったナポリで活動した画家たちの作品で装飾されていた。本発表ではこのポッツォーリ大聖堂の内陣部分に着目し、17世紀における聖堂再建直後の絵画配置に関して、発表者が新たに発見した古文書史料等を用いながら復元案を提示する。さらに、内陣において展開された装飾プログラムに関する考察を行う。

ポッツォーリは港湾都市として古くから発展し、使徒パウロが布教の途中に立ち寄った場所として聖書にも登場する。ポッツォーリ大聖堂は異教神殿を利用して建てられた簡素な教会堂であったが、1632年から1650年頃にスペイン人司教マルティン・デ・レオン・イ・カルデナスによって全面的に改修され、絢爛たるバロック建築へと生まれ変わった。しかし1964年の火災により大きな被害を受け、現在は閉鎖中である。

火災以前の大聖堂の状況は先行研究や写真資料によって比較的容易に復元することができる。しかし、18世紀から20世紀にかけて行われた度重なる修復工事のため、火災以前においても17世紀当時の内陣の状態がそのまま保存されていたとは考えにくい。そこで、ヴァティカン機密文書館とポッツォーリ司教区歴史文書館において行った調査をもとに、17世紀および18世紀の一次史料を用いながら、内陣の絵画主題と配置の変遷をたどり、復元案を提示する。

また装飾プログラムに関しては、デ・レオン司教の在任中、大聖堂がこの都市の守護聖人である聖プロクロスに加え、改めてポッツォーリで殉教した聖ヤヌアリウスにも捧げられたことに鑑みて、次のように考察する。17世紀の再献堂の結果、大祭壇には新たに聖ヤヌアリウスの殉教の主題が置かれ、同時期に設けられた内陣の絵画装飾においては、ポッツォーリの教会史と関連を持つ聖人たちの図像が重視されている。その一方で、キリストや聖母マリアといったより一般的な主題を秩序立てて配置するという要求もまた、大聖堂の正当性を強調するために実現されなければならなかった。そこで内陣においては、大祭壇を納める正面部分をポッツオーリで殉教した聖人たちに割り当て、側壁においては上下に配置された絵画区画を用い、上段にキリストと聖母マリアの主題を、下段に使徒パウロをはじめとして同地の教会史に関わる聖人たちの主題を配置し、空間に一種の階層性を生み出すことで合理的な解決が図られたと考えられる。

17世紀および18世紀の史料と、大聖堂の歴史に関する先行研究とを総合すると、内陣の絵画配置は幾度も改変を受けており、1964年に火災にあった時点ではほとんど当初の様子をとどめていなかったと言える。しかし、史料と共に絵画の変遷を跡付けることによって、デ・レオン司教が当初意図していた内陣装飾画の主題と配置を一定程度明らかにすることができるのである。